

十二月のテーマ

心を整理する



え・古屋智子

手紙が紡ぐ 夫婦関係

サ プリメントの販売業を営んでいるA子さんは、昨年八月、知人の誘いで倫理法人会に入会しました。その後、富士教育センターで開催されている「経営者倫理セミナー」を受講しました。

セミナーの中で、屋外で静坐(せいざ)をする実習がありました。静坐をする場所までは、素足で林間の砂利道を歩いていきます。A子さんは、約百名の受講者の先頭を歩くことになりました。

季節は二月。身も凍るような寒さの中、足裏から冷たさと痛みが伝わってきます。A子さんは、慣れない素足で歩くのは嫌だなどと思いつつ、下を見ながら、少しでも痛くないながら歩き始めました。

下を見ながら、少しでも痛くないように、さそうな道を選んで歩いていくと、講師の声が聞こえてきました。

「道を選んでいませんか。足の痛みは、知らず知らずのうちに、身近な人に与えてきた痛みと感じてください。その痛みを受け入れてください」

その言葉を聞いて、A子さんは「本当にそうだ、自分はいつも楽

な道ばかりを選んできたな」と振り返りました。そして、「この痛みを受け入れよう」と覚悟を決めて歩くうちに、夫の顔が浮かんできたのです。

実はA子さんは、夫婦関係に問題を抱えていました。夫とは、会話や挨拶すら交わさない状態が長く続いていました。このセミナーが終わったら、離婚を告げようと心に決めていたのです。

「私も知らず知らずのうちに、夫を傷つけていたのだろうか…。今まで痛みを感じてあげられなくてごめんなさい」

素足で、一歩ずつ大地を踏みしめるたびに、申し訳なかったという思いが込み上げました。そして、その日の夜、夫に宛てた手紙を書いたのです。

セミナーが終了し、A子さんは自宅に戻りました。夫婦の冷たい空気は変わりません。翌朝の出勤前、思い切って夫に声をかけ、夫への手紙を読み上げました。

「これまで私は、心の中であなたを責めていました。でも、嫌な思

いをさせてきたのは、私の方だったのかもしれない。ごめんなさい。こんな私を受け入れてくれてありがとう。あなたの優しさに気づける妻になりたいです」

手紙を読み終えると、A子さんは「いつてらっしゃい」と、夫を抱きしめたのです。夫は逃げるように出勤しましたが、A子さんの心には清々しさがありました。

その日の夜、食事の準備をしていると、「今朝は驚いた。けれど嬉しかったよ」と、夫から話しかけてきました。そして、「今日は久しぶりに気持ちよく仕事が出来た。これからもよろしくね」と、優しく抱きしめてくれたのです。A子さんはただ涙が溢れました。

「書く」という行為には、感情を整理する作用があります。セミナーという非日常の場で得た気づきは、手紙を書くことを通じて、自分たち夫婦の関係を深く見つめることにつながり、自ら歩み寄る勇氣をもたらしてくれました。

その後、夫婦の関係は修復され、今も仲睦まじく暮らしています。